

あざみ 令和7年7月度特別作品

里山暮らし あざみ

朝は、鳥の囀りて目覚め、眼下に見える島から昇る朝日は、鳥々を赤く染めます。夕暮には、裏山に沈む夕日、夜は、コンビナートの灯が不夜城の様に見える。龍りがちの私には、不自由なこともあります。鳥や蝶、庭に四季折々に咲く花を眺めます。また、裏の畑から届く新鮮な野菜や果物、隣家からは、おはぎ、稲荷ずしなどが届き、古い時代の習わしが今も残り、人情も厚い、そんな暮しです。里山の自然の怖さもありますが、学ぶこともたくさんあります。

裏畑に人の声して日脚伸ぶ

朝市へ桃の花積み一輪車

花蜜柑匂ふ畑に立ち止まる

朝焼に染まれる瀬戸の小島かな

大樟の根方にありて梅雨茸

梅雨の蝶隣の屋根を越えて来し

日の暮るるほどに浮き立つ山法師

裏畑の崖に靡いて青薄

海見ゆる軒に風鈴鳴りにけり

盆提灯掛け連ねたる仏間かな

《作品鑑賞》 綾乃

里山での丁寧な暮らしを、時には大胆に、時にはシャープに切り取り詠まれているあざみさん。今回は、春を感じるころから、盛夏、初秋へと移り変わる瑞々しい時期の里山を五感で楽しめるような御句の数々に、思わず惹き込まれてゆきました。

朝焼に染まれる瀬戸の小島かな

昨年世界一美しい美術館に選ばれ、私が大好きな下瀬美術館のお近くかと思えます。向かいに巖島、さらに瀬戸の小島という多島美をいつでも眺められる贅沢。朝焼はどんなに美しいことでしょうか。

日の暮るるほどに浮き立つ山法師

白く沢山の花をつける山法師は昼間も目を引き爽やかですが、日の暮れたときの様子を詠まれたところが秀逸と思いました。山法師の名は、一説によると白い頭巾をかぶった比叡山延暦寺の法師姿からつけられたとも。さわさわと山に気配が感じられるような御句でもあります。

海見ゆる軒に風鈴鳴りにけり

朝焼の海、眩しく海面が乱反射する昼間から夕暮れてゆき、コンビナートが湾に沿って輝きだす。どの時間帯の海の風鈴を詠まれたのかは定かではありませんが、素敵な軒下の涼やかな暮らしであることは間違いないと、しつかりと切れのある御句には、里山や海に音がしかと響き渡るような強さも感じられました。

里山を守る必要性について叫ばれているこの頃ですが、まずはあざみさんのように身近に、細やかに自然を見つめ、愛着をもつことが大切であると気づかせて頂きました。